Q&A

評価に関する悩みの中でも、特に多く寄せられた質問 ・・・・・・・ P112

「評価規準の作成」に関連する質問 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P112

「評価規準の見取り方（評価の方法）」に関する質問 ・・・・・・・・ P115

「評価を行うタイミング（評価機会）」に関連する質問 ・・・・・・・・ P118

「評価する際の判断の目安」に関連する質問 ・・・・・・・・・・・・・・ P118

「評価したことを次の指導へ生かす方法」に関連する質問 ・・・・・ P119

※この Q&A は、本調査のアンケートにおいて、「『体育』の学習評価を行うにあたり、困っていることや悩んでいることがあれば記述してください。（自由記述）」の項目でいただいた質問を整理し、回答を作成したものです。

評価に関する悩みの中でも、特に多く寄せられた質問

Q1	運動が苦手な児童生徒でも評価がＡになることがありますか？ （関連内容　理論編Ｐ13「⑥観点ごとに総括する。」）

あります。まず評価する際の前提として、３つの資質・能力をバランスよく育て、３観点で評価することが大切です。例えば観点別評価が、「知識（A）・技能（C）」⇒B、「思考・判断・表現」⇒A、「主体的に学習に取り組む態度」⇒A の場合、総括が BAA となり、評価が A となることは考えられます。

Q2	多くの児童生徒が活動している中で、円滑に評価を行うにはどうしたらよいですか？

パフォーマンス評価をゲームや話し合いなどの活動を通じて行う際は、個々の児童生徒を順番に評価するのではなく、全体を見渡しながら、（A）と（C）に該当する児童生徒をピックアップします。その際、評価者は、（B）の評価規準をしっかり頭にいれておくことがポイントです。全体を観察する中で、（A）や（C）に該当する児童生徒を確認できた場合に、その児童生徒を記録します。最終的に、（A）と（C）に該当しなかった児童生徒については（B）として評価します。

Q&A

「評価規準の作成」に関連する質問

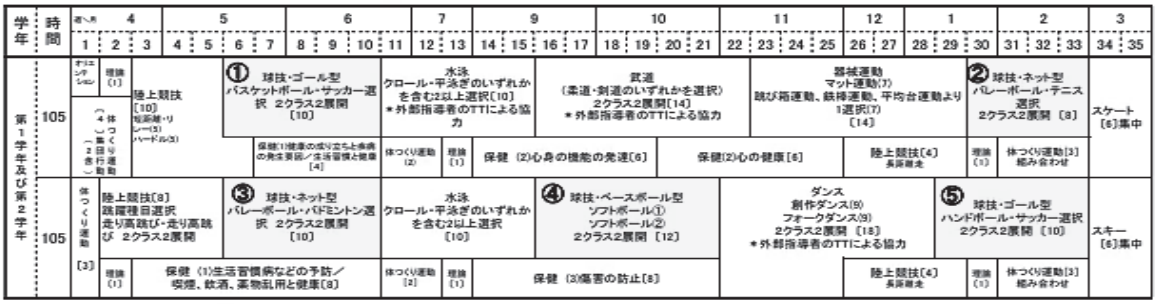
Q3	個人差がある中で、何を基に評価したらよいですか？ （関連内容　理論編Ｐ10「③単元の評価規準を作成する。」）

指導対象の児童生徒の中には、器械運動が得意な子やボール運動・球技が得意な子、コミュニケーション能力が高い子など多様な児童生徒がいると考えられます。そのため、評価を行う際は、あらかじめ評価規準を作成しておきます。評価規準は、学習指導要領の内容を基に単元が始まる前に作成します。作成にあたっては、各学校の実態を踏まえ、体育・保健体育および学年の目標に準拠していることが求められます。さらに、児童生徒の運動経験や学習の積み重ねを考慮するとともに、前の学年や次の学年との系統性も考える必要があります。

Q4　３観点の評価のバランスを考える上で大切なことは何ですか？

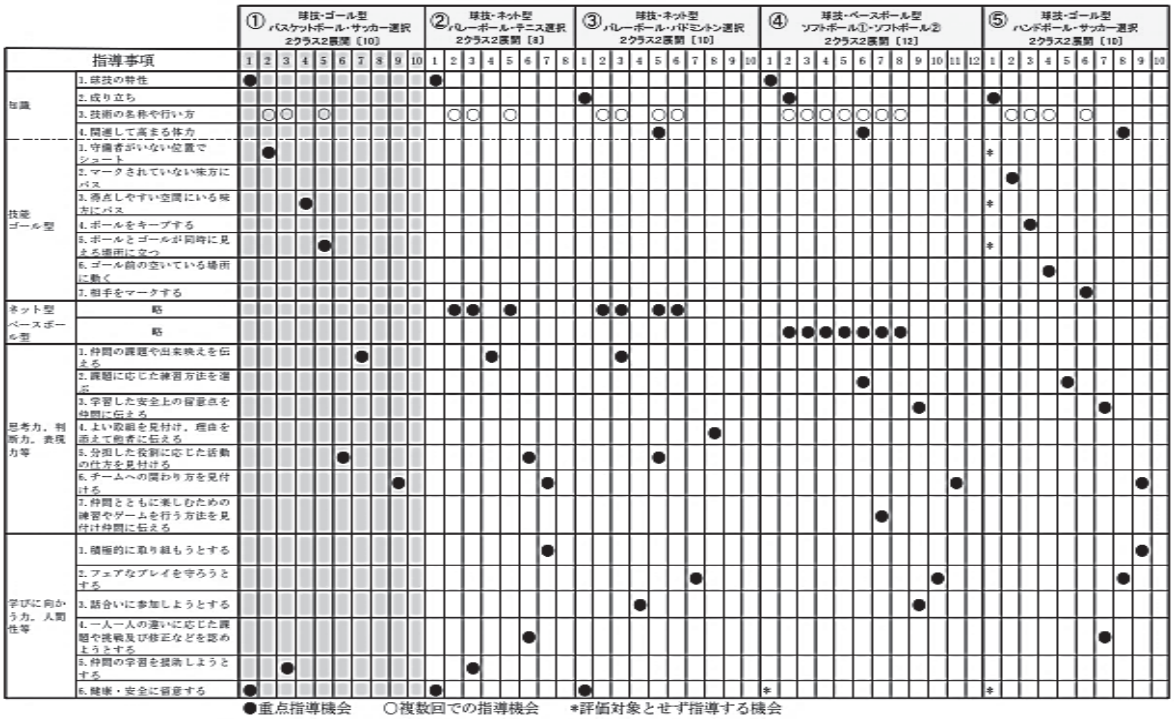
まず、指導と評価の一体化を念頭に計画を立てます。評価する時期や場面を精選し、実現状況が把握できる段階で評価を行うことが大切です。１単位時間で評価する観点を１～２程度に絞ることで効果的・効率的に進めることができます。さらに、内容のまとまりにおける指導事項の重点化をすることで、指導内容を系統立てて整理し、偏ることなく配置（重点化）することができます。

中学校における年間指導計画の例（第１学年及び第２学年抜粋）**指導事項の重点化**



学習指導要領の第１学年及び第２学年の内容の取扱いにおいて、「アからウまでを全ての生徒に履修させること」としていることを踏まえ、第１学年で①ゴール型、②ネット型、第２学年で③ネット型、④ベースボール型、⑤ゴール型を取り上げている。

第１学年及び第２学年「球技」における２年間を見通した指導事項の配置の例　**重点化**



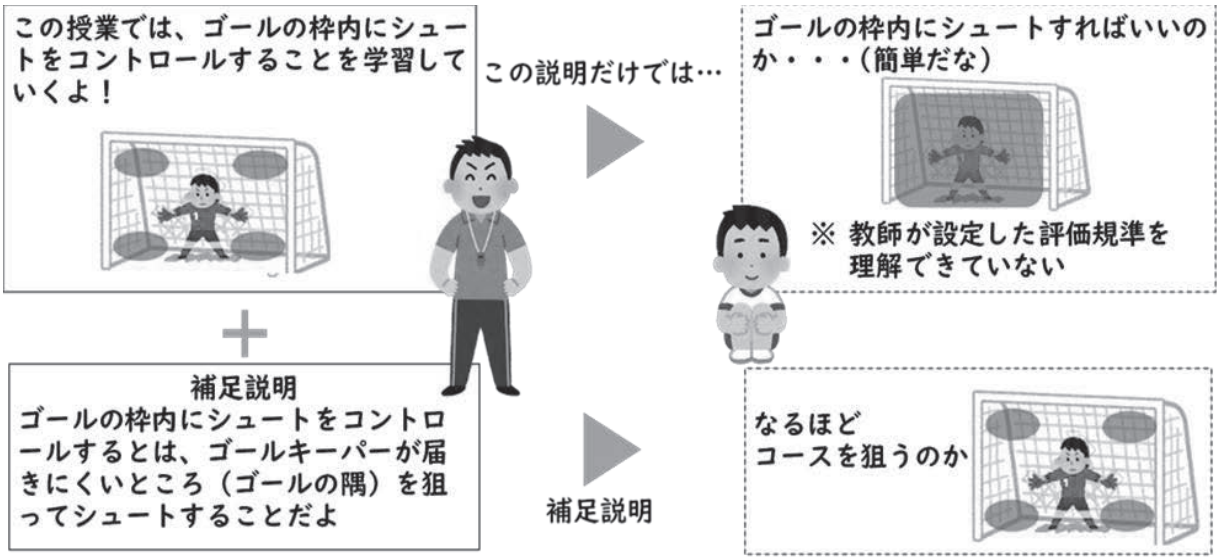
「知識及び技能」の指導事項については、型ごとに指導する必要があるため、ゴール型とネット型は２回の指導機会、ベースボール型は１回の指導機会で取り上げることとなる（ネット型，ベースボール型は省略）。このことから、例えば、運動の特性については、ゴール型、ネット型、ベースボール型のそれぞれにおいて効率的に指導機会を設けるなどの工夫をしている。また、「思考力、判断力、表現力等」及び「学びに向かう力、人間性等」で示される具体的な指導事項は、「内容のまとまり（第１学年及び第２学年「E 球技」）」に対して示されていることから、意図的、計画的に配置している。

Q5 評価に関するルーブリック表の作成のポイントはありますか？

A	ゴールの枠内かつ①空いているコースに②強いシュートをコントロールすることができる。
B	ゴールの枠内にシュートをコントロールすることができる。
C	A・B以外

上の表は、（A）を「空いているコースを狙う（下線①）」と「強いシュート打つ（下線②）」の両方を含む、ルーブリックの例を示しています。この場合①と②の両方を満たさなければ（A）と判断できません。このように、1つの評価に複数の要素が含まれると、評価が難しくなります。そのため、1つの要素に絞り、迷わずに評価できるようにすることが大切です。

また、（B）の「ゴールの枠内にシュートをコントロールすること」については、具体的にどのようなことを指すのか、補足説明が必要です。



Q6 教員間で評価規準を共有するためには、どのようなことが考えられますか？

例えば、評価規準や評価方法を事前に協議し明確化することや、評価に関する実践事例を蓄積し共有すること、評価結果の検討等を通じて評価に関する教員の力量の向上を図ること、教務主任、研修主任や教科主任等を中心として学年会や教科等部会等の校内組織を活用することなどが考えられます。

Q7	「指導と評価の計画」の効果的な使用方法を教えてください。 （関連内容　理論編 P11「④指導と評価の計画を作成する。」）

指導と評価の計画を作成することは、指導目標を達成する上で大切です。単元に入る前に、① 単元の時間数の確認、② 指導内容の確認、③ 診断的評価を実施し、計画を作成します。

① 単元の時間数の確認

まず、実施する単元の時間数を確認します。単元の時数によって、②、③に関係する指導内容に繋がります。また、児童生徒に対して単元のオリエンテーション時に時間数を伝えたり、単元の途中で残り何時間実施するかを知らせたりすることで、児童生徒は見通しをもって学習に臨むことができます。

② 指導内容の確認

次に、時間数を基に指導内容を決定します。学習指導要領を参考に、資質・能力別の指導目標や例示を活用します。指導内容は、担当教員が単独で決めるのではなく、年間指導計画に基づき、教員間で「各単元で児童生徒が身に付ける内容」を共有し、連携して決定します。また、指導内容が過多にならないよう精選します。

③ 診断的評価の実施

単元実施前に、児童生徒にアンケートや試しのゲーム等を通じて診断的評価を行います。②で確認した指導内容を基に作成した計画が、児童生徒の実態と合っているかを確認し、必要に応じて修正・変更します。また、単元の途中では形成的評価を実施し、児童生徒がどの程度学習内容を身に付けているかを確認します。計画はあくまでも案であり、児童生徒の実態や学習状況に応じて柔軟に修正・変更していくことが求められます。

以上、①～③を実施して、計画を立て授業を進めていきます。この取組を継続的に行うことや、他の教員と共有することが、より良い指導と評価につながります。

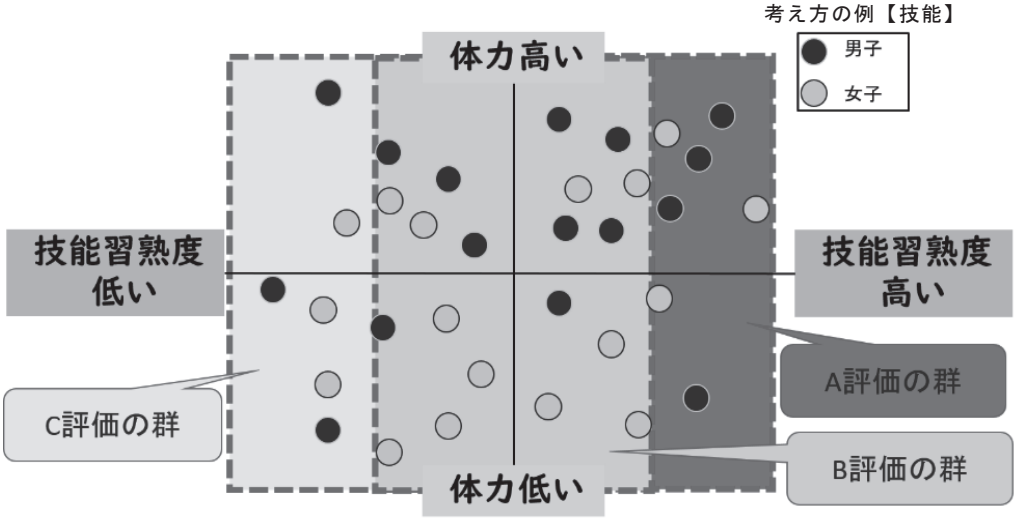
「評価規準の見取り方（評価の方法）」に関する質問

Q8	評定はどのように出しますか？ （関連内容　理論編 P13「⑥観点ごとに総括する。」）

評定は、単元末や学期末等に実施される観点別学習状況の評価を総括したものです。評定へ反映する際には、各単元の配当時間数や指導事項に対応した評価規準数を考慮するのか、また観点ごとバランスをどのように設定するのかなど、評定への総括の考え方や方法を、各学校で十分に検討する必要があります。すなわち、評価をどのように評定へ反映させるか、また評定の適切な決定方法等については、各学校で定めることとなります。

Q9 男女共習における技能の評価はどのようにすればよいですか？

技能の評価においては、性別や体力の差ではなく、個々の能力の違いであるという考え方が大切です。評価規準に照らし、単元を通して身に付けた技能を、的確に見取ります。



Q10 ワークシートの記述をどのように評価すればよいですか？

ワークシートの記述内容が「感想」や「がんばったこと」だけにならないようにするためには、指導した観点に沿った「問い」を設定することが大切です。例えば、本時で「球技の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあること」について指導し、それを評価するのであれば、ワークシートの記述欄に「学習したパスにはどのようなパスがありましたか。また、そのポイントやコツは何ですか」という問いを作り、児童生徒の考えを導きます。

Q11 長期見学等の児童生徒の評価についてどうしたらよいですか？

児童生徒の中には、一時的なけがや病気のため、実施する単元を休んだり見学したりする場合があります。体育の授業の場合、運動する場面が多くなり、「技能」の学習が中心に展開されます。しかし、授業を通じて身に付けるべき資質・能力は「技能」だけではありません。例えば、その行い方を知る（知識）、自己や仲間の課題を発見し伝える（思考・判断・表現）、互いに助け合い教え合おうとする（主体的に学習に取り組む態度）など、学習内容は多岐にわたります。そのため、授業では指導内容や学習場面、教材等を工夫し、３つの資質・能力をバランスよく指導、評価することが大切です。

Q12 思考・判断・表現の評価はどのような方法がありますか？

（関連内容　理論編Ｐ７「２．学習評価の考え方『②思考・判断・表現』」）

既存の知識や気付きを基に、課題を発見する場面での評価（課題発見）、自身の動きをモデルとなる動きと比較したり、学習したことと関連付けたりするなどして、課題を解決する方法を考えている場面での評価（課題解決）、学習を通して考えたことを仲間に伝える場面での評価（考えたことを表現）を行う方法として、学習カード、論文やレポートの作成、観察から行うことなどが考えられます。さらに、それらを集めたポートフォリオの活用も考えられます。

また、思考・判断・表現の評価において、学習カードの中でなぜそう考えたのか理由を問う設問や学習内容と既習の内容を比較したり関連付けたりする設問を設定するなど内容を明確にしておくことが大切です。

Q13 評価における ICT 活用のポイントは何ですか？

３つの資質・能力の何を育成するものなのか、ねらいや効果を十分検討した上で、「どの観点（３観点）を」「どの場面で」「どのように（ツールや方法等）」を考えることが必要です。

活用例

観点	場面	どのように（ICT を活用した評価方法）
知識	柔道の受け身や技の名称・体さばき等の理解度を確認する場面	動画教材やプレゼンテーションを活用し、アンケート作成・管理ウェブアプリケーションで知識の定着度に関してテストを行う。その回答を基に、理解度を評価する。
技能	陸上競技（走り幅跳び）の踏切動作や空中姿勢を学習する場面	タブレットのスローモーション機能で撮影し、踏切の位置や空中動作の変化や改善度を記録する。その記録映像を基に、技能の定着を評価する。
思考・判断・表現	バレーボールの試合後に、チームの課題やその解決方法を考える場面	試合映像を撮影し視聴した後、共有ウェブアプリケーションを活用し、生徒の課題や解決方法を集約する。その集約したデータを基に、教員が適切に課題や解決策を考えることができているかを評価する。
主体的に学習に取り組む態度	体力や技能の程度にかかわらず全員が楽しめるルールを考え、実際にそのルールを基に行った試合を振り返る場面	アンケート作成・管理ソフトウェアを使い、ルールを考えて試合を行った際の意見や感想等を集約する。その集約したデータを基に、指導した内容について取組もうとしていたか、また、これからしていこうとしているかを評価する。

「評価を行うタイミング（評価機会）」に関連する質問

Q14	評価方法のタイミングはどうしたらよいですか？ （関連内容　理論編 P11、12「④指導と評価の計画を作成する。」）

「知識」と「思考・判断・表現」の評価は、学習カード等の記述を一つの手がかりとしながらも、児童生徒の実際の行動や発話など多面的な観点から行うことが求められます。特に、指導から期間を置かずに即時評価を行うことで、理解の程度を把握し、適切な支援につなげることが大切です。また、児童生徒の発言や行動を「観察評価」によって捉え、それを加味することで評価の妥当性や信頼性を高める工夫も必要です。一方、「技能」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、技能の獲得や向上には一定の学習期間が必要であり、主に「観察評価」を通じて行うため、指導後に十分な学習期間と評価期間を設けることが適切です。このように、評価にあたっては、観点に応じた期間や方法を考慮し、児童生徒の実態を的確に捉えることが求められます。

「評価する際の判断の目安」に関連する質問

Q15	体育の学習において、どのようにＡ評価を考えればよいですか？ （関連内容　理論編 P13「⑥観点ごとに総括する。」）

体育の学習において、教員は学習を通して育むべき資質・能力を明確にしておくことが大切です。また、十分満足できる姿（A）は、おおむね満足できる姿（B）を踏まえた上で（B）の姿よりも高まった姿を示しますが、（A）の姿は（B）の姿とは異なる新たな姿として設定するものではないことに注意する必要があります。

Q16	小学校において、知識や思考力があっても技能が十分に発揮できない児童、またはその逆の児童をどのように評価すればよいですか？

小学校では、「運動をしながらの気付き」も知識として捉え、知識と技能を切り離さずに考えます。そのため、「できる」ようになってから「分かる」こともあれば、「分かっている」けれど「できない」こともあります。技能で「できない」場合でも、「分かっている」知識はしっかりと評価することが大切です。一方で、技能は「できている」ものの、知識として「言葉や文章として表現できない」場合も考えられます。知識と技能を切り離さずに捉えることは大切ですが、それぞれの評価規準を明確にしておくことが求められます。

「評価したことを次の指導へ生かす方法」に関連する質問

Q17	評価したことの中でも、どのような内容をフィードバックしたらよいですか？ （関連内容　理論編Ｐ５「（２）評価の基本構造」）

記録の伸びや動きの高まりは、学習の中で即時に評価し、児童生徒に積極的にフィードバックします。その際、伸びた要因を考える場面等を設定することで、自己調整力を育むことにもつながります。また、観点別学習状況の評価や評定には示しきれない、児童生徒一人一人の良い点や可能性、進歩の状況は、「個人内評価」として実施します。「個人内評価」の対象となるものは、児童生徒が学習の意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で伝えることが大切です。特に、「学びに向かう力、人間性等」のうち、「感性や思いやり」など児童生徒の良い点や可能性、進歩の状況などは積極的に評価し、児童生徒に伝えることが大切です。

Q18	児童生徒の自己評価やグループ評価を評価に活用するにはどうしたらよいですか？

まず、児童生徒の学習の定着状況や課題を的確に把握することが大切です。そのためには、児童生徒の実態や学習の流れに沿った評価規準を設定し、「できた」「できていない」が明確に分かるようにします。例えば、小学校３年生「跳び箱運動」における開脚跳びでは、「踏切」、「着手」、「着地」の３つの局面に着目し、それぞれの局面で理想的な動きができているかを自己評価できるようにします。その際、ICT を活用し、児童生徒が自分の動きや他者の動きを動画で撮影し、振り返ることで、より客観的な自己評価やグループ評価が可能となります。こうした評価をもとに、児童生徒の学習状況を把握し評価に活用します。

Q19	自己評価や振り返りをどのように評価に生かせばよいですか？

例えば、高等学校学習指導要領解説保健体育編においては、科目「体育」の思考力、判断力、表現力等に関する内容は、入学年次、またはその次の年次以降のすべての運動領域の内容の冒頭部分に、「自己やチームの課題を発見し」と記載されています。これは、授業中に自身や仲間の動きを振り返る学習が必要であることを示しています。そのため、課題を発見している姿（発言、記述等）を明確にし、判定の目安を設定しておくことが大切です。また、その姿が見られた、あるいは見られなかった場合には、生徒に対し明確に伝えることで、生徒の学習改善につなげることができます。この考え方は他の評価の観点にも共通しています。

Q20 評価の内容をどのように生徒に伝えればよいですか？

指導したことを評価する際に、児童生徒に評価の内容を的確に伝えることは、児童生徒の学習改善につながるだけでなく、学習意欲を高めることにもつながります。例えば児童生徒がペーパーテストの返却や学期末に通知表を受け取る際、自分がどのように評価されているのかを楽しみにしている様子が見られます。このように評価したことを児童生徒に適正にフィードバックすることは非常に大切です。また、フィードバックは単元末や学年末に評定としてだけ示すのではなく、単元計画の中で、評価規準に基づく姿が現れたときや、その姿に満たなかったときにも、その都度伝えることが大切です。こうした継続的な評価の共有を通じて、指導と評価の一体化（指導したことを評価する）を図ることができます。